

教室(診療科)紹介 (99)

耳・鼻・のどを見る

耳鼻咽喉科学講座 (大森)

教授：枝松秀雄
 准教授：和田弘太
 医局長：松島康二
 助 教：志村英二
 長船大士
 佐々木優子
 新井千昭

耳鼻咽喉科の特色：耳・鼻・のど（喉頭）を見る

耳鼻咽喉科（耳鼻科）の診察の特色は、耳・鼻・のどは肉眼では観察できないため、軟性ファイバーや硬性内視鏡

を使用し、病変を明瞭に確認することが重要です。所見が確認できれば、患者さんに負担の少ない内視鏡手術が可能になります。

耳鼻科の専門分野は、音を聞き取る聴覚、身体のバランスをとる平衡、嗅覚、味覚などの感覚器としての働き、鼻呼吸や喉頭の発音などの上気道としての役割、口腔から咽頭へと嚥下機能などヒトが社会生活を営む上での基本的で重要な多くの機能を対象とします。

耳鼻科には、顔面、頸部、口腔、咽喉頭などに発生する悪性腫瘍を対象とする、頭頸部外科という大きな支柱もあります。また、小児も成人も高齢者も各年代に多い耳鼻科疾患があり、幅広い年齢層への対応が必要です。

しかし一人の耳鼻科の専門医師がこれら全てに対応することは不可能です。大森病院の耳鼻科の専門スタッフは、小児科や脳外科や眼科との密接な連携をもとに、地域の基幹病院としてチーム医療を推進しています。

耳鼻咽喉科学講座（大森）の最近 10 年間の歩み

東邦大学医学部耳鼻咽喉科学講座（大森）（当講座）の開講は、1928（昭和3）年の佐藤重一先生が初代教授です。私が10代目の教室責任者として着任したのは、2004（平成16）年7月です。当時は3号館が新築されて手術室、ICU、救急室などが整備され大森病院の大きな発展が期待された時期です。同時に、研修医制度に matching が導入され全国の大学病院に新卒医師が不在となる大きな変革の2年間が始まった時期でした。当科でも限られた人員で新しい



医局風景

第 68 回東邦医学会総会担当後の打ち上げ (2014.11.14)

教室作りがスタートしました。幸い当時の教室員一同が大学病院での教育、研究、臨床への厳しい業務に対する研鑽を今まで大きな事故を起こさずに、日々積み重ねてきています。

当時のスタッフは、私が行っている内視鏡手術を中心とした耳科学を支えてくれた安田真美子医局長と佐々木優子医師でした。2011（平成23）年には和田弘太准教授が教室に参加し副鼻腔内視鏡手術を長船大士、新井千昭医師らと充実させてくれました。また松島康二医師らの咽喉頭科学での音声改善手術の進展、頭頸部外科学を歴代担当された須田稔士、長岡真人、志村英二医師らの昼夜を問わない患者支援の頑張りのおかげでもあります。限られた人員の中で多岐にわたる臨床実績を上げて無事に10年を迎えられたことに安堵し、また誇りに感じています。2013（平成25）年6月には小原 明病院長から大森病院診療部門表彰を当科に頂きました。

今後期待される発展

医科大学の教育は、医学生は6年間の基礎系・臨床系の学習での医師国家試験に要求されるレベルへの到達、初期研修医は卒業後2年間に一般臨床医として必要とされる実地臨床の体得、後期研修医は専門医を目指した臨床修練と手術手技の獲得など、多くの教育スタッフによる長期間の支援と教育が必要です。

当科では、1年次の early clinical exposure、3年次の系統講義、5年次の bed side learning (BSL) 臨床実習、6年次の clinical clerkship などに積極的に医学生を受け入れています。医学生時代に当科での臨床経験に参加し、“耳鼻咽喉科”に興味を持ち入局する教室員が多いことは嬉しいことです。

大学病院での診療は常に新しく安全な医療を社会からも患者さんからも、あるいは医療行政からも要求されます。しかし医師の技量が短期間に大きく進歩するわけではあり

ません。当科で開発してきた内視鏡耳科手術を例にとっても、少しずつ普及を始めていますが、全国的になるまでには10年以上の継続が必要でした。この間に公益財団法人内視鏡医学研究振興財団からの研究支援を複数回受けています。内視鏡による新医療のさらなる発展への大きな励みとなっています。

耳鼻咽喉科を志望する研修医へのメッセージ

耳鼻咽喉科の専門医になるには、一般社団法人日本耳鼻咽喉科学会で認定された指導指定病院で4年間の実地臨床に参加することが必要です。後期研修医として耳鼻咽喉科と頭頸部外科の幅広い臨床修練が要求されます。耳・鼻・咽喉頭などの基本手術の体得、緊急時の気道管理としての気管切開、悪性腫瘍への適切な検査と入院計画などを自主的に行うことが重要です。大森病院耳鼻咽喉科はこれらの疾患への対応をもれなく研修することが可能です。その実績は、専門医試験の合格率がほぼ100%となり、東京都内の13医科大学のなかでも有数の良好な成績です。これらの実績に対して、最近3年間の新入医局員は6名ですが、2016年度も2名の東邦大学初期研修医が参加を希望しています。

2年後には一般社団法人日本専門医機構による新しい専門医制度が開始される予定ですが、要求される到達目標はより広範囲で高度になりますが、当科は十分に対応可能な診療体制です。耳・鼻・のどの基本手術を身につけたい、聴覚や平衡の感覚器の機能を学びたい、上気道の生理も勉強したい、小児も診たい、頭頸部の大きな手術に参加したい、など志望項目はどのようなであっても十分に専門医として育つ環境が整備されています。臨床が忙しいのは当たり前です、活発で明るい当科にぜひ参加して下さい。「耳鼻咽喉科学講座（大森）」の90年の伝統が新入教室員を一人前の専門医になるよう支援します。

(教授：枝松秀雄)

DOI: 10.14994/tohoigaku.2015.r004